

3 縄文時代後期の竪穴住居跡について

平成13年度の発掘調査で検出した縄文時代後期後葉の竪穴住居跡は、第205・208・209号住居跡の3軒であり、これらの長径・炉・柱穴配置・形態を見ていくと、次のようになる。

番 号	長 径	炉	柱 穴	形 態	備 考
第205号竪穴住居跡	4,46m	地床炉	壁柱穴	円 形	
第208号竪穴住居跡	6,7m	地床炉	?	円 形	
第209号竪穴住居跡	6,4m	地床炉	主柱穴（4本）	楕円形	出入り口

本遺跡の竪穴住居跡の特徴を概観すると、長径及び地床炉をを主とする共通の面をもちながらも、柱穴配置等で3軒とも様相を異にするものである。次に、青森県内の同時期で検出した竪穴住居跡を炉と柱穴配置の二属性を用いて分類し、本県の陸奥湾地域に位置している遺跡から検出した竪穴住居跡を検証する事とする。

竪穴住居跡の分類

分類にあたっては、地床炉・石囲炉・炉無しのA～C類の三分類に分類した。

大分類の中で柱穴及び出入り口施設の配置から、更に類型の中で細別をおこなった。

A類型 地床炉

A 1 類 地床炉と柱穴

A 2 類 地床炉と主柱穴と壁柱穴

A 3 類 地床炉と不規則な柱穴

A 4 類 地床炉と出入り口施設（主柱穴4本と主柱穴＋壁柱穴）

B類型 石囲炉（石囲炉と不規則な配置）

C類型 炉無し

	A 1	A 2	A 3	A 4	B	C
上野尻 遺跡	1		1	1		
米 山（2）遺跡			1	2	1	
蛭 沢 遺跡			1		4	2
尻 高（4）遺跡	1		1	3	1	
二 井 遺跡			2			
外崎沢（1）遺跡					3	1
風 張 遺跡	12	10	7	10	5	1

表 遺跡内の類型分類

縄文時代後期後葉の時期は、A類の地床炉、B類の石囲炉（全周する石囲炉と一部みられる石組炉がある）、C類の炉無しのグループに分かれ、A類の地床炉にバリエーションがみられるものである。なお、遺跡内の竪穴住居跡の検出をみると、一属性（統一した規格）のみの採用でなく、各属性の組

み合わせによって竪穴住居が構築されている。本遺跡を例にすれば、A1・A2・A3類の三種の属性をもつが確認されるのである。

ちなみに、県内の陸奥湾地域の遺跡の炉を概観すると、A類の地床炉とB類の石囲炉をは、米山(2)遺跡(青森県教育委員会2000)・上野尻遺跡では石囲炉をもたず、蛭沢遺跡(青森市教育委員会1979)・外崎沢(1)遺跡(脇野沢村教育委員会1979)では、石囲炉をもつものが多いという差が見られる。ちなみに石囲炉をゆうする竪穴住居は、柱穴の配置が不規則な配置である。また、尻高(4)遺跡(青森県教育委員会1985)では出入り口施設をもつ竪穴住居が多く、米山(2)遺跡と共通するものである。一方、新井田川流域の風張(1)遺跡(八戸市教育委員会1990・1991)では、壁柱穴が主体を占め支柱穴(4本柱)をもつ組み合わせが主体であり、柱穴の配置から明確な柱穴配列をもつ竪穴住居が多いのが特徴である。

これらをまとめると、後期後葉の時期は地床炉・石囲炉・炉無しの形態が確認され、各遺跡内においても、属性の竪穴住居跡形態の採用の差がみられるものである。一方、陸奥湾地域など支柱穴がはっきりせず、柱穴の不規則な配置などは、共通要素がみられ、小地域におけるまとまりがみられるものである。このことは、地域毎(青森県内では陸奥湾地域と新井田川流域では異なる)における差があり、竪穴住居跡形態の採用が地域ごとの特色がみられる事が確認されられると思われるのである。

(成田滋彦)

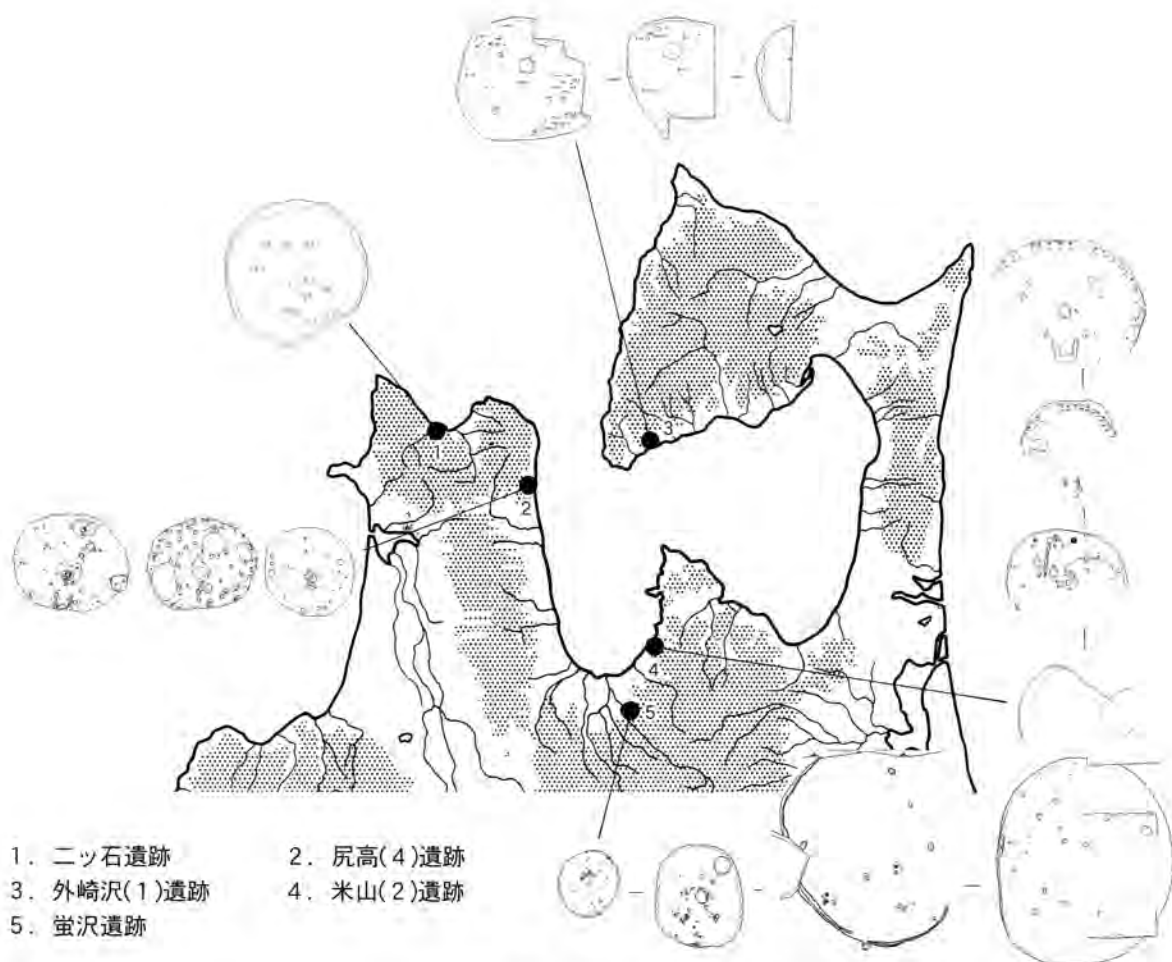


図135 縄文時代後期後葉竪穴住居跡